

マルクス「ザスーリチへの手紙」再考

メタデータ	言語: 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2023-12-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 福本,勝清 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/0002000214

マルクス「ザスーリチへの手紙」再考

福本勝清

I) 「ザスーリチへの手紙」の読まれ方

中沢新一『僕の叔父さん 網野善彦』(2004)のなかで、網野の言葉として、マルクス「ザスーリチへの手紙」(「ヴェ・ザスーリチの手紙への回答下書き」)について、以下のようなことが語られている。

ロシアのミールという農村共同体について自分も少し詳しく研究してみた。そしてそれがとてもすばらしい要素をたくさんもった社会的組織体であることを知った。このミールを破壊して、その廃墟の上に立つことによってしか、ロシアの革命は進めることができない、という考えを私は今では否定する、とマルクスは書いた。ミール共同体の中から、人類が望んでいる新しい社会が生まれ出てくる可能性というもの、マルクスはここで語ろうとしていたんですね(中沢 p.41)。

ミール共同体の中には、原始・未開以来の人類の体験と知恵が生き残っている。それを破壊してはいけない、と言っているんじゃないでしょうか。ミールという農村共同体の中に保存されている、原始・未開の要素を取り出してきて、それを新しい社会を構築していく原理にすることが必要だ、と言おうとしているんだと思います(p.42)。

網野がマルクス「ザスーリチへの手紙」を高く評価していることがわか

る。また、その評価の中心は、農村社会の共同体に伝えられる原始・未開の要素のなかに、新しい社会の原理になるものがあると、マルクスが考えていた、と網野がみなしている点にある。この網野の「ザスーリチへの手紙」に関する話は、彼が、戦後主流であった社会経済史研究から社会史への流れをつくるきっかけとなった『蒙古襲来』(1975)を書く前の時期に、義兄、つまり妻の兄であり、新一の父である中沢厚との議論のなかで出てきたことであった。おそらく、1970年前後のことであったと思われる⁽¹⁾。戦後のマルクス史学の興隆を象徴する領主制理論の寵児としてデビューした網野は、1950年代前半の日共の武装闘争路線の時期、挫折を経験し、その後、常民研究所に身を置きつつ、マルクス主義歴史学の陣営のもと、中世史家として、研鑽をつんでいた。網野は、『蒙古襲来』(1975)前後より、歴研流社会経済史研究を超える新しい歴史学方法論に向け一歩踏み出すことになるが、その理論的支えとなったものの一つが、マルクス「ザスーリチへの手紙」だったということになる。この網野の社会史へ向けての踏み出しは、マルクス主義歴史学の陣営からの離脱に結果する⁽²⁾。

この網野の「ザスーリチへの手紙」をめぐる議論は、「共同体的規制」に象徴されるように、共同体という言葉が、封建遺制とほぼ同義語であった戦争直後の時代から四半世紀が過ぎ、歴史的進歩の意味が見直され、それまでは遅れたものとされたものが、かえって新しい響きをもって語られるようになった時代の雰囲気伝えるエピソードでもある。当時のベトナム戦争における農民ゲリラの善戦と米軍の苦戦から、前近代的な価値が、近代への叛乱を通して、近代を超える可能性を持つのでは、と夢想した時代でもあった。

この網野の「ザスーリチへの手紙」の理解は当時の時代を反映して情緒的なニュアンスを含むものであった。当時、共同体はそのように読まれる傾向があったといえよう。

最近評判となった斎藤幸平『人新生の「資本論」』(2020)にも「ザスーリチへの手紙」への高い評価が書かれている。

この返信については、よく知られている。『資本論』における歴史的
分析は、あくまでも「西ヨーロッパに限定されている」とマルクスは
はっきり述べるのだ。近代化を推し進めることで、わざわざロシアに
残っている共同体を破壊してしまう必要はない。むしろ、ロシアにお
いては、これらの共同体が、拡張を続けて世界中を呑み込もうとする
資本主義に対する抵抗の重要な拠点になる。「その現在の基礎のうえ
で」、「西欧の資本主義がもたらした肯定的な成果を吸収しながら発展
させていくことが、 Kommunismus を実現するためのチャンスになる」
とマルクスは書いている。

ここで重要なのは、資本主義という段階を経ることなしに（＝「カウ
ディナのくびき門を通ることなしに」） Kommunismus に移行できる可能
性があると、マルクスがはっきり認めている事実である。最晩年のマ
ルクスが、単線的な歴史観とヨーロッパ中心主義から決別していたこ
とは、明らかだ（斎藤 p.153）。

そして、この議論をロシアだけに限定する必要はどこにもない。ア
ジアやラテン・アメリカの共同体にも、拡大して良いはずである。

というのも、マルクス自身、ミールだけでなく、アジアの「村落共
同体」も、資本主義による暴力的な破壊を逃れて、現代まで残存する
ことのできた原古的共同体の一種とみなしていたからだ。つまり、世
界中に存在するそのような共同体は、ロシアの農耕共同体と同じ力を
有している。そのようにマルクスは評価しているのだ。

…社会主義へ至る経路は、もはや、西欧の発展モデルに限定されな
い。むしろ、非西欧社会においては、それぞれの制度や歴史がもつ複
雑性や差異を考慮しながら、 Kommunismus への移行方法が検討されな
くなくてはならないとマルクスは考えたのだ（p.154）。

斎藤は、1987年生まれの若手研究者であり、アムステルダムの「国際マルクス・エンゲルス財団」を中心として進められている新MEGA編集に協力している日本人の一人でもある。その斎藤の「ザスーリチへの手紙」に対する評価の視点が、網野とそれほど隔たっていないのに、少々驚かされる。また、旧社会主義国ロシアの再独裁化や社会主義国中国の「専制化」が進む今日、このような斎藤の「共同体」論の表出に、ひどく戸惑わざるをえない。

北海道農村出身者である筆者は、都会生活を始めてしばらくたった頃、つまり1970年前後、都会の慣れぬ人間関係を疎ましく思っていたこともあり、次々に登場してきた種々の共同体論の盛行に、大いに慰められたことがある。前近代的なものなかから、反近代の実践を通して、近代を超えるものが生まれる、といった幻想も、その当時としては、心地よいものであった。

だが、そこからすでに半世紀が過ぎた。この半世紀の間に、それらの幻想は霧散したはずではなかったのか。文化大革命の中国、あるいはベトナムやキューバの社会主義も、なんら近代を超えるものではなかった。前近代は前近代でしかなく、近代ですらなく、ましてや近代を超えるものではありえない。そのことは十分に身に浸みたのではなかったのか。

このような自分なりのこの半世紀の総括と、「ザスーリチへの手紙」はどのような関係にあるのだろうか。このような問自体、奇妙な問には違いないが、強引にこう言ってみよう。「ザスーリチへの手紙」を再読しつつ、この問の答えを出す試みをやってみよう。そして、最終的な問は、次の問である。

マルクスは本当にミール共同体のなかに新しい社会の「萌芽」や「ひな形」を見つけたのだろうか。または、マルクスは、本当にそう信じたのだろうか、と。

答えを見つける前に、「ザスーリチへの手紙」自身について、再読し、その内容を先の視点に沿って検証しなければならない。まずは、先行研究を覗

いてみよう。

Ⅱ) 「ザスーリチへの手紙」の概要

「ザスーリチへの手紙」(「ザスーリチの手紙への回答下書き」)のヴェ・イ・ザスーリチ(1849-1919)は、19世紀末ロシアの著名な革命家であった。「ヴ・ナロード」運動(1874)のなかから、政治結社「土地の自由」が生まれ(1876)たが、1878年、ザスーリチによるペテルブルグ特別市長官トレポフの狙撃が契機となり、直接行動論を唱えるナロードニキ組織『人民の意志』が組織される。1879年、無罪を得たザスーリチは、人民の意志派には属さず、農村工作を志向するプレハーノフなどの「土地総割替」派に属すも、翌1880年、国外に亡命する。主にスイスなどの地で亡命生活を送っていたプレハーノフたちは、マルクス主義を受容し、1883年の「労働解放団」結成への流れとなるのだが、ザスーリチもそのメンバーであった。

ザスーリチは1881年2月、ジュネーヴよりロンドンのマルクスへ手紙を書いた⁽³⁾。ザスーリチは、ロシアの知識人の間ではマルクス『資本論』が広く読まれていること、且つ、皆、ロシアの農村共同体 *commune rurale* の運命について議論していることを述べる。というのも、農村共同体の問題は「ロシアにおいては他とは比較できぬくらい緊急重大なものである」からであり、議論は、はたして、「この農村共同体が…ひとたび自由になれば、社会主義の道においておのれを発展させることができる」のか、それとも、死滅する運命にあるのか、の二つの見解に分かれている。『資本論』の著者である、あなた自身のご意見を開陳していただきたい、と彼女は返事を求めたのである(平田清明 1971)。それに対し、マルクスは手紙の下書きを書き始め、結局、四通の草稿を書くことになる。第四草稿⁽⁴⁾は、実際のマルクスのザスーリチへの返信とほぼ同じ内容である。それゆえ、議論の対象となるのは、第一草稿、第二草稿、第三草稿の三つである。

平田 (1971) によれば、各下書き (草稿) の長さは、以下のごとくである。

「手紙本文はレターペーパーでわずか三十行。D・リャザノーフ (1879-1938) の編集した『マルクス-エンゲルス-アルヒーフ』に収録された姿では三八行。これに対して第一草稿は、このアルヒーフ版で四一五行 (約十倍)、また第二草稿は一九二行 (約五倍)、第三草稿は二一〇行 (約六倍)。これら三草稿とは逆に、第四草稿は、他の草稿のいずれよりも圧倒的に短く、アルヒーフ版で僅か三〇行、本文の約四分の三にすぎない」(平田 1971.10 p.39)

各草稿の内容についても、平田のまとめが優れている。長い紹介となるが、後論の理解のために、極めて好便であり、了解されたい。

第一草稿は、五つの部分に分かれる。

- (i) 『資本論』の直接的適用範囲。
- (ii) ロシアにおける農耕共同体の歴史的環境とその構造上の形態。
- (iii) 農耕共同体発展の理論的可能性の確認と、それを現実へと転化する客観的根拠と主体的契機。
- (iv) 共同体に襲いかかり、その上からの解体とその内的解体を促進する諸契機。
- (v) 共同体に加えられた人為的な傷を必然的な崩壊の兆候とするブルジョア自由主義者のイデオロギーに対する批判。

「この草稿の最大の特徴はブルジョア自由主義的…歴史的必然論に対して、『ロシアの共同体を救うには一つのロシア革命が必要である』と再度にわたって書きしるしていることである」(平田 1971.11 p.168)

(i) の『資本論』の直接的適用範囲は、次のようなものである。「だから、私は、この運動の『歴史的宿命性』を、西ヨーロッパ諸国に明示的に限定しておいたのである」(p.169)。

このような言い回しは、第一草稿のみならず、すべての草稿で述べられており、歴史的必然に拘束された直線史観（単系的発展論）に疑問を感じていた人々に、マルクス自身は多系的な発展論を抱懐していたこと、歴史選択（オルタナティブ）の可能性をみとめていたことを確信させたのである。

第二草稿も、五つの部分に分かれる。

- (i) 『資本論』の直接的適用範囲を論ずる。
- (ii) あなた（ザスーリチ）のいうロシアのマルクス主義者は、私にはまったく未知の人々である、というようなつれないことばが述べられている。つまり、マルクスがプレハーノフなどマルクス主義を受容しつつある亡命者グループよりも、ロシア国内のナロードニキ「人民の意志」派を信頼し、支持しているとの表明でもある。
- (iii) ロシア農耕共同体のおかれた歴史的環境。
- (iv) ロシア農耕共同体の構造的形態とその解体要因の指摘。
- (v) ロシア型資本主義の特徴、およびロシア共同体を脅かすものとしてのロシア国家による抑圧と資本主義的侵入者による搾取。

「第二草稿の特徴は、ロシア論のまとまった叙述がみられることであり、逆に、農耕共同体を分岐点とする世界史的把握が叙述としてはきわめて少ないということである」(p.169)

第三草稿は、二つの部分に分かれる。

- (i) 第一草稿以来の、『資本論』の適用範囲を論ずるもの。
- (ii) 人類史としての世界史の展開過程における共同体の諸形態＝段階論を普遍的に展開し、その巨大な世界史的視野の中でロシアのミール共同

体を位置づけ、その歴史的環境の特殊性検出と相まって、ロシアでの共同体維持発展、の可能性を展開しようとするもの (p.169)。

この第三草稿の特徴はまさに上記 (ii) にあることはいうまでもない。「農耕共同体の固有の二重性」にもとづいて、共同体的土地所有から、土地私有にもとづく共同体への転換を論証した、この第三草稿の (ii) の部分が、もっとも諸家の注目を浴びたのは当然である。

この第三草稿への準備稿となるものが、直前の第二草稿ではなく、実は、第一草稿であった。農耕共同体に固有の二重性、第一次構成から第二次構成への過渡期、といったコンセプト、あるいは「この共同体は、全中世をつうじて自由と人民生活の唯一のかまど [根源] となっていた」等々は、すでにここ (第一草稿) に表述されている。

では、第一草稿と第三草稿の間にある第二草稿は、どうかというと、まず、書き出しの部分が、第一草稿よりも、ややぎこちなく感じることに、また、他の草稿とは異なり、「あなた方のことは知らない」と受け取れるような、冷淡な文言があること、そして何よりも、用語として農村共同体は使われているけれども農耕共同体は用いられていないなどの特徴を持っている。そのため、第一草稿と第三草稿が、第二草稿を介さずして、内容的に近いとの印象を与える。

この問題に答えたのが、日南田静真 (1973) であった。日南田は、雑誌『現代の理論』編集部が企画した「マルクス・コンメンタール」における「ザスーリチへの手紙」に関する福富正実論文 (1973) へのコメントにおいて、各草稿は第一→第二→第三、ではなく、第二→第一→第三、の順序で書かれたものであることを明らかにしたのである。その主要な論点は、

- 1) 冒頭の「原蓄」命題は、第二では「封建的生産の資本家的生産への<転化>転成」の出発点という言い方であったのに対し、第一、第三ではともに「資本家的生産の創生」となる。

- 2) 第二にはなかった「自己の労働力にもとづく私的所有」の「他人労働の搾取にもとづく・賃金制度にもとづく資本家的私的所有」による「押しつけ」という引用句が、第一と第三にはともにある。しかも、この過程を示す「西洋的運動」なる語が、第一ではじめて本文外に書きこまれ、ついで第三では本文に最初から入っている。
- 3) 特に問題となるのは、やはり農耕共同体に関して、であり、日南田はそれを決定的なものと述べる。農耕共同体なるタームは、第二ではまったく用いられず、第一の途中で用いられはじめ、第三では積極的に用いられている。農村共同体は、ザスーリチからの手紙にあった用語であり、それゆえ、その用語を使って答えようとするのは当然であった。だが、マルクスは、ロシアの農村共同体に割替慣行があることを、タキトゥスの時代のゲルマン的共同体に割替あったとするマウラーの解釈を結びつけ、その割替を含む共同体を、農村共同体とは別の言葉で表そうとした。その具体的な試行錯誤が如実に現われているのが第一草稿であり、何度もゲルマン共同体、農村共同体、原古的共同体などが、一度書いては消し、また別の言葉を書いては消し、といった思考の繰り返しと、一歩ずつの前進がみられる。農耕共同体ですら、一度は消されている。

結局、「マルクスがゲルマニア具体の、またロシア具体の存在を指すには「農村共同体」を用い、「どこでも社会の原古的構成の最近の型として現われる」普遍的な存在の範疇的な概念を示すには「農耕共同体」を用いるように」（日南田 1973 p.233）した。つまり、現実な、あるいは歴史的な存在を表す時には、農村共同体を、割替を含む共同体—共同体的所有から私的所有への過渡期の共同体—を表す理論モデルを意味する時には、農耕共同体を用いる、ということになる。

それゆえ、第一草稿における試行錯誤を経た後の、第三草稿においては、最初から「原始的共同社会…の諸型の一つである農耕共同体と名づけるのが適当なものが、ロシア共同体の型である。西洋でこれに当たるものが、ゲル

マン共同体…タキトゥスが述べているような農耕共同体」と書くことになる⁽⁵⁾。

Ⅲ) 農耕共同体を中心に

マルクス主義者にとって、共同体を論じる際にまず参照されるべき文献は、『経済学批判要綱』の一部である『資本制生産に先行する諸形態』（以下『諸形態』と略す）である。資本論草稿である『要綱』は、スターリン体制下の1939-41年にソ連で刊行された。戦後まもなく、その一部である『諸形態』（ロシア語版）が日本にもたらされ、まもなく日本語訳も出版されたが、『諸形態』にもとづく共同体論の研究が盛んとなったのは、戦後、東ドイツにおいて出版された『諸形態』（1952）および『要綱』（1953）（各ドイツ語版）が到来して以降のことであった。

『諸形態』到来以前において、マルクス主義者が共同体を論じるとすれば、主要には「ザスーリチへの手紙・草稿」の記述を、理論的な手掛かりとするほかなかったのである。たとえば、横川次郎「支那における農村共同体とその遺制について」（『経済評論』1936年7月号）などがその例である。

『諸形態』に基づく諸家の共同体論は、1960年代中葉に始まった日本におけるアジア的生産様式論争の、議論の中心に位置した。このアジア的生産様式論争と、1970年初頭に始まったミール共同体をめぐる論争は深い関連を有する。

アジア的生産様式論争に大きな刺激を与えていた平田清明による1971年の論考「歴史的必然と歴史的選択」は、ロシアの共同体をめぐる論争に大きな弾みを与えたと言える。さらに同年の林道義『スターリニズムの歴史的根源』も、強いインパクトによって、論争を活発化させたといつてよい。しかしながら、論争に奥行きや厚みを与えていたのは、当然、ロシア研究者の諸論考であった。

そのなかの一人、佐藤正人「ザスーリチの手紙への回答およびその下書き」(1973)は、「…共同体発展の《理論的可能性》はともかくとして、《現実的可能性》については各草稿で全くニュアンスが異なっており、どの草稿を引用するかによって、どのような結論でも引き出すことができる」と批判している。たしかに、当時の研究水準として、そのような側面があったことは否定できない。だが、日南田論文などのテキスト・クリテークの進展によって、次第にそのような側面を払拭されていったと考える。

では、本稿の冒頭で示された網野善彦や斎藤幸平の「ザスーリチへの手紙」についての理解が正しいかどうか、あるいはマルクス「ザスーリチへの手紙」が彼らの希望や祈りに沿うものなのかどうか、を検証する前に、主として20世紀後半の諸家の論考が含む問題点について、幾つか検討してみよう。

まず、農耕共同体(commune agricole 農業共同体)をめぐって、である。上述の日南田静真は、福富論文へのコメントのなかで、マルクスがいうタキトゥス時代のゲルマン共同体＝農耕共同体と、1870年代当時の、すなわち農奴解放令以後の、ロシアの農村共同体では、まったく歴史段階を異にしていることを指摘する。同じ農民保有地における所有の二重性(共同体的所有と私的所有 or 個人的所有と私的所有)といっても、また、割替を共通にしているといっても、タキトゥスのゲルマン人の共同体とロシアの農村共同体では、所有も、割替も、同じ意味、同じ機能を有していない。置かれた歴史段階、歴史環境が異なるからである。それらは、ゲルマン人の共同体のもとでは、歴史発展に向けた積極的な意味—中世の自由と人民生活のかまど(根源)—を持つが、ロシアの共同体のもとでは、受け身で、追い詰められた意味しか持たない。それは、皇帝や領主から共同体に課せられた重い負担を、共同体成員の間で、できるだけ公平に負う、という意味しか持たない。日南田によれば、割替も、実際には、同じロシアでも、地域ごとに大きな偏差があり、また、形骸化もあり、「個別農家の経済的消長を規制する機能もほと

んど果して」おらず、とても一概に論じられないものであった。何よりもまず、「共同体未墾地もなく周囲を地主的土地所有で囲まれた中央部ロシアの多くの旧領主地農民の共同体では、農奴解放後、人口・戸数増加にともない、全体として一人当たりの分与地がますます減少してゆけばかりのロシア農村共同体では、「田野はなおありあまっている」といわれたゲルマン共同体 = 農耕共同体に比すべくもないのである」(日南田 1973 p.228)。

日南田にとっては、諸家がこぞって高く評価する第三草稿そのものが問題なのであろう。第三草稿で語られている農耕共同体は、ほぼロシアの農村共同体とは無縁の存在なのである。少なくとも、ロシアの共同体の理論モデルとはなりえないものであった。日南田にとって、各草稿のなかでもっとも評価できるのは、最初の草稿である第二草稿である。少なくともそれは、ロシアの現状分析から出発しようとしていたからである。

さらに、マルクスの農耕共同体論そのものにも弱みが存在した。タキトゥス時代のゲルマン的共同体を農耕共同体と呼び、その主要な特徴を割替に求めた点が問題となる。タキトゥス『ゲルマニア』のゲルマン人たちの農耕に関する記述「毎年耕地を取り換える」から、それを割替と捉えたのはマウラーであり、マルクスはそれに従ったわけだが、その後の研究の進展は、マウラーの解釈に沿うものではなかった。すでにエンゲルスは、『家族、私有財産、国家の起源』(第4版 1891)において、タキトゥスの記述については柔軟な理解—エンゲルス自身の言葉では農学的な意味に理解—をすべきだとして、未墾地はまだたっぷりあるので「毎年別の区域をすきかえして前年の耕地を休ませるか、またはまったくの荒野にかえるにまかせた」と解しており、穏当な見解だと思われる。

ただ、後のマルクス史家たちは、実証として割替が認められないという理由から、このマルクスの農耕共同体概念を歴史研究に適用できないとは考えなかったようである。共同体的土地所有から私的所有への過渡期、「おのおのの耕作者は、自分にあてがわれた畑を自分自身の計算で用益し、その果実

を個人的にわがものとして領有する」あるいは「私的な家屋、耕地の分割耕作、およびその果実の私的領有」(第一草稿)により、各々の耕地の占有者のそれぞれ一家族あるいは個人一の所有の度合いがより強まり、それと土地の共同体的所有との矛盾が深まるプロセスを、農耕共同体の時期として把握しているのであろう。割替があった方が、その時期を明確に措定することができるが、なかったとしても、農耕共同体の概念(農耕共同体の構造に固有の二重性)が無効になったとは考えない。古代史家にとって農耕共同体概念がロシア農村共同体へ適用可能かどうかは、重要な問題ではない。重要なのは、古代史に関わる部分である。

だが、1881年当時のマルクスにとっては、割替慣行をもつロシアの農村共同体を自らの理論的な地平に載せるためには、タキトゥスの共同体に割替があつてほしかったのであろう。そう考えるしかない。もし、タキトゥスの共同体に割替慣行がないとすれば、第一草稿、第三草稿で展開された農耕共同体の概念を、ロシアの農村共同体に適用することが難しくなる。それを可能にするためには、ゲルマン的共同体とロシアの農村共同体の間の、別な共通点—しかも切実なもの—を新たに見つけなければ説得力をもたない、ということになる。

本来ならば、次に、マルクスとナロードニキの関わりについて述べたいところである。平田(1971)は、マルクスが生前、ロシアにおける革命運動の担い手として、ナロードニキ、具体的には人民の意志派を支持・信頼しており、ロシアの、生まれたばかりの、マルクス主義者を、否定的に評価していたことを、新しい発見として、ややほこらしげに書いている。この問題は、なぜマルクスが、三つの草稿における議論を無視して、あるいは棚上げにして、結局は、ザスーリチへきわめて短い返信を出しただけに終わったのか、という問題に関係がある。上述のごとく、ザスーリチは人民の意志派ではなく、マルクスが不信の眼差しで見っていた—自称マルクス主義者であるとはいえず—亡命ロシア人のグループに属していたからである。

平田が問題提起した1970年初頭を想起すれば、マルクス主義者・社会主義者は、新旧を問わず、社会主義の祖国ロシアのマルクス主義—マルクス・レーニン主義—以来の価値観を、意識的あるいは無意識のうちに、受け継いでいた。すなわち、ボリシェヴィキが一番偉く、つぎにメンシェヴィキで、最下位がナロードニキとなる。さらにいえば、それぞれのグループのなかにおいても、たとえばボリシェヴィキのなかにも、いつからボリシェヴィキだったかとかレーニンと近かったかによって、価値の序列があった。だから、マルクスが、生まれたばかりとはいえプレハーノフなどのマルクス主義者を信頼せず、ナロードニキである人民の意志派を支持し、かつ信頼していたということを歴史的事実として受け入れるには、当時としても、一段の時間と一応の努力が必要であった。だが、さすがに21世紀の20年代ともなれば、ボリシェヴィキであろうと、メンシェヴィキやナロードニキであろうと、19世紀から20世紀にかけて、歴史のなかを、それぞれ、如何に生きたかによって、個々に評価すべきであり、上記の党派は、あくまで個人が所属したグループを表すのであって、従前のような価値の序列とは無縁である。

平田(1971)が述べたマルクスとナロードニキ、人民の意志派との交流については、和田春樹(1975)などにおいて積極的に取り上げられており、マルクスだけでなくマルクス死後、エンゲルスもまたロシアのナロードニキとの交際を継続していた点を含め、それらは諸家においてナロードニキを含むポピュリズム諸潮流への関心を高めることになる。

「ザスーリチへの手紙」を取り上げた著作ではないが、本稿のテーマと大いに関連するものとして、林道義『スターリニズムの歴史的根源』(1971)がある。林は、ツァー・ロシアの専制の基礎がミール共同体であり、かつ革命後の、農業集団化においても、「コルホーズの多くがミール単位で、ミールを基礎にしてつくられ、しかもその性格もミールに近いものをもっていった」(林 p.33)とし、スターリン体制の基礎となっていたと論じた。では、

ロシアの共同体（オブシチナ）ミールは、いったい、マルクスの共同体論の、いかなる類型に属するのか。林はすでに始まっていたミールの性格規定をめぐる論争、ミール＝ゲルマン的共同体説を唱える雀部幸隆とミール＝アジア的共同体説を唱える肥前栄一の論争において、自分は肥前説に全面的に賛成であると明言する（p.36）。

林は、ミール共同体の顕著な特徴として、①土地の定期的割替、②納税に対する連帯責任の原則、③三圃制と結びついた耕地の散在、の三つを挙げ、①②はアジア的なものであり、③はゲルマン的なものであり、両者の特徴が混在するところに、論争が生じる原因があるとしながらも、ウェーバーの実質的平等原理と形式的平等原理の二項対立を借り、ミールの定期的割替は、実質的平等原理であり、個の未発達をもたらしたとして、ミール＝アジア的共同体説に立つ。林は、③の三圃制については、ミール（ここではアジア的共同体）が、上から再編される際に混入されたものとみなしているようである（p.42）。

この林の著作は、そのインパクトに富むタイトルおよび刺激に富む内容により、多くの論評、批判を招いた。ロシアの実際を知るロシア研究者の間でも、保田孝一（1971）は、肥前、林説に賛意を表したが、日南田（1972）は疑問を呈し、帝政期の小家族化傾向—肥前はアジア的共同体の基本的な特徴として先の①②のほか③大家族制を挙げている—や納税連帯責任の廃止（帝政末）のほか、割替の多くは分家の新設であり、ミールは、アジア的共同体の構成要件を満たしていないとした。

スターリン専制の根源に迫ろうとする林の意気込みは本物であったが、林の試みは性急すぎたように思う。たとえば、コルホーズがミール単位だとする説については批判が多い。これは実証の問題であり、理論はそれに従うしかない。また、ミール＝アジア的共同体説も問題が多い。というのも、アジア的共同体、古典古代的共同体、ゲルマン的共同体などは、いずれも本源的な共同体であり、ミールのように、専制国家と階級的抑圧の下、歴史的に

形成された組織や制度とは概念を異にする。この点は、日南田説が正しい。

タタールの軛以前の社会についていえば、東欧からロシアにかけ、政経のシステムも、類似したものがなだらかに連なっており、三圃制もまたそのようにしてロシアに広まったものであろう。それゆえ、当初存在したものは、東欧諸社会に類似したものであえていえばスラヴの共同体であり、その上に乗っかっていたプロト封建制といったものであったと思われる。アジア的なものは、タタールの軛とともに、外から持ち込まれたのであろう。林は①②を本来的なものと捉え、③三圃制を後に上からの再編の際、混入されたと捉えたが、筆者は、③が本来的なもので、タタールの軛及びそれに続くモスクワ大公国の専制の深まりとともに、①②等が上からの再編によって導入され、専制国家の基礎となる農村共同体が成立していくと考えた方が合理的だと考える。つまり、筆者の考えはウィットフォーゲル説に近い⁽⁶⁾。

IV) 分割地をめぐる

「ザスーリチへの手紙」の最初の草稿、すなわち第二草稿は問題の提起、それを受けた第一草稿は、農耕共同体論による議論の発展、そして第三草稿は、その完成となるはずであった。

第三草稿は第二草稿や第一草稿と異なって、冒頭に、「親愛な市民へ」で始まる手紙前文をもっている。つまり、マルクスは草稿を二つ書き、いよいよザスーリチへ返信するために、手紙を書き始めたといえる。そして、この第三草稿は、上述の平田の言葉を借りれば、「人類史としての世界史の展開過程における共同体の諸形態＝段階論を普遍的に展開し、その巨大な世界史的視野の中でロシアのミール共同体を位置づけ」（平田 1971.11）、その後の共同体の可能性を展望しようとするもの、であるはずであった、たしかにその途中までは。

なぜならば、第三草稿は、第二草稿および第一草稿とは異なり、途中で、

文章が切断されているからである。最後の言葉は、la parcelle 分割地、であった。

さて、振り返って、分割地という用語は、各草稿にどんな現われ方しているのだろうか。可能なかぎり例を挙げて検証してみたい。

まず、最初に書かれた草稿である第二草稿では、以下のように使われている。なお <> は、抹消された部分である。

土地所有は共同的であるが、<他面、実際には、耕作、生産は、分割地農民の耕作であり生産である>おのおのの農民は、西洋の小農民と同じように、自分自身の計算で自分の<分割地>畑を耕作し、用益する<その分割地の果実をわがものとして領有する>。土地の共同所有と土地の分割用益という、<耕作の進歩の一要素であった>ずっと遠い過去の時代に有益だったこの組合せは、現代では危険なものになっている（全集版 p.402）。

全集版の翻訳は、平田が担当している。参考のため、国民文庫版（手島正毅訳）⁽⁷⁾、岩波文庫版（大内力訳）も挙げておく。

土地の所有は共有であるが、<他面、実際には、耕作、生産は分割地農民の耕作であり、生産である>おのおのの農民は、西洋の小農のように、自分自身の計算で、自分の耕地を耕作し経営する。土地の共有と土地の分割経営という、ずっと遠い過去の時代に有益だったこの結合は、<それは、耕作を進歩させ発展させる（多産にする）要素であったが>、現代では危険なものになっている（手島訳 p.118）。

土地の所有は共同ですが、しかし各農民は、西側諸国の小農と同様に、その耕地をみずからの勘定で耕作し、経営しております。共同所

有と土地の分割地的な経営に、こういうずっと過去の時代には有益であった組合せは、われわれの時代には危険なものになっています（大内訳 p.80）。

La propriété de la terre est commune, mais (de l'autre côté, dans la pratique, la culture, la production est celle du paysan parcellaire) chaque paysan cultive et exploite (sa parcelle, s'approprie les fruits de son champ) son champ à son propre compte, à l'instar du petit paysan occidental. Propriété commune, exploitation parcellaire de la terre, cette combinaison (qui était un élément (fertilisant) de progrès de la culture), utile aux époques plus reculées, devient dangereuse dans notre époque. *Roger Dangeville, Lettres de Marx à Véra Zassoulitch, In: *L'Homme et la société*, N. 5, 1967. より引用。

この一節からわかることは、parcelle（名詞）は一度、parcellaire（形容詞）は二度使用され、parcelle 分割地は消された部分にあり、parcellaire も paysan parcellaire 分割地農民は消され、exploitation parcellaire de la terre 土地の分割利用の方は残っているということである。微妙な問題であるが、これは偶然とは言えないであろう。マルクスはこの時点では、ロシアの共同体の農民保有地、つまり分与地を、parcelle 分割地と表すには、なお問題がある、あるいはしっくりこないと考えていたことを示しているのではないであろうか。

これは、parcelle が分割地を意味するばかりでなく、本来、土地細片、小地片などを意味することに関係するのではないかと思われる。分割地農業、分割地農民は前者の、土地の分割利用は後者の意味合いを含む可能性が高い。

上記のパラグラフの後に、次の一節がくる。

しかしながら、共有の草地の用益においてロシアの農民がすでに集団の様式を実行していること、彼らがアルテリ契約に慣れているということが分割耕作から集団耕作への彼等の移行を大いに容易にするであろうこと、ロシアの土地に地勢が大規模に結合された機械制耕作をうながしていること、…これらのことを忘れてはならない。

* 分割耕作：la culture parcellaire

手島訳：分割耕作，大内訳：分割地経営

この分割耕作は、先の土地の分割利用と同じく、分割地を直接意味するものではないであろう。

では、続いて書かれた第一草稿において、どう書かれているのか。

ロシアは、「農耕共同体」が今日まで全国的規模で維持されている、ヨーロッパで唯一の国である。ロシアは東インドのように外国の征服者の餌食ではないし、近代世界から孤立して生存しているのでもない。一方では、土地の共同所有は、<それが西洋の資本主義的生産と同時に存在し、それと物質的ならびに知的な諸関係を結んでいることとあいまって>ロシアが個人主義的な分割地農業を直接かつ徐々に集団的農業に転化してゆくことを、可能にしている (p.391)。

* 分割地農業：l'agriculture parcellaire

手島訳：分割地的な個人主義的な農業

大内訳：分割され個別化された農業

このパラグラフの分割地農業は、わざわざ個人主義的と冠している以上、おそらく農民分割地の分割地であろう。次のパラグラフはどうであろうか。

それゆえ、「農村共同体」は、カウディナのくびき門を通ることなし

に、資本主義制度によってつくりあげられた肯定的な諸成果をみずからのなかに組み入れることができる。それは、分割地農業を、徐々にロシアの土地の地勢がうながしている機械の助けによる大規模農業に置きかえることができる (p.393)。

*分割地農業：l'agriculture parcellaire

大内訳：分割地による農耕

*ただし、この一節は消去されたパラグラフにある。このカウディナのくびき門を含む(消去された)パラグラフは、手島正毅訳では訳出されていない。

このカウディナのくびき門を含むパラグラフは、同じ草稿の前のページにも登場し、かつ第三草稿にも出現する⁽⁸⁾。このパラグラフに登場する分割地農業の分割地も、農民分割地の分割地なのであろうか。分割地農業は、ここでは大規模農業に対置されているので、共同体農民の現状の分与地耕営を意味している可能性があり、判断に迷う。もし農民分割地の分割地ならば、農業経営の個別化、個人化を目指したストルイピン時代のフートルやオートルブ創出の試みはいったい何だったということになるう。

最初のパラグラフ (p.391) では、分割地農業は集团的農業に対置され、次のパラグラフ (p.393) では、大規模農業に対置されている。

この分割地農業を含む二つのパラグラフは、明らかに、ロシアに将来起り得るであろう、革命後の、土地改革後の農業のことを言っている。西洋の資本主義的生産と同時に存在し、それとの諸関係から種々の助けを得ることができることが、分割地農業の発展—集団農業あるいは大規模農業の、前提とされているからである。残念ながら、西欧における革命が成就しなかったために、社会主義ロシアは孤立し、西欧諸国からの援助も不可能となったのだが。

分割労働の例も、引用しておこう。

ロシアの土地の地勢が大規模な機械制耕作をうながしており、農民がアルテリ契約に慣れていることは、彼らが分割労働から協同労働に移行するのを容易にしている (p.392)。

* 分割労働：travail parcellaire

手島訳：分割的労働, 大内訳：分割地の労働

そのうえ、ロシアの農民がアルテリ契約に慣れていることは、彼らが分割労働から集団労働へ移行することを容易にするであろう (p.394)。

* 分割労働：travail parcellaire

手島訳：分割地労働, 大内訳：分割地的経営

大内は宇野派の経済学者であるが、農業経済学や農業問題に関する著書も多く、parcellaire を分割地の、分割地的と訳したのは、専門家としての見解であろう。分割地農業の二つのパラグラフとは異なり、分割労働から集団労働へ、分割労働から協同労働へは、手紙が書かれた当時の、現状認識をいったもののように見える。だが、実際にはアルテリがあろうと、個々の農民の細片化された分与地の労働において、集団労働や協同労働は必要とされてはいない以上、やはり革命後の世界を意識している。

第三草稿では、まず、parcellaire が二度使用されている。

自然的な、血縁関係という強靱ではあるが狭隘な紐帯から解放された、土地の共同所有とそれから生じる社会諸関係とが、農耕共同体に強固な基盤を保障し、それと同時に、個別的家族の排他的領域たる < 私的な > 家屋と屋敷地、分割耕作、および、その果実の私的領有が、より原始的な共同社会の構造とは両立しない個人性の飛躍をもたらすの

である (p.407)。

* 分割耕作 : la culture parcellaire

手島訳 : 分割地耕作, 大内訳 : 分割地経営

だが、肝要なのは、私的領有の源泉としての分割労働である (p.407)。

* 分割労働 : le travail parcellaire

手島訳 : 分割労働, 大内訳 : 分割地の労働

そして、最後のパラグラフは、ロシアの農村共同体における、分与地の散在について述べている。長文だが重要なので、略さず引用する。

共同体の成員たちは、地代論の研究をしたことはないが、同一量の労働が自然的豊度と位置との異なるさまざまな畑に支出される場合、さまざまに異なる収穫をあげるということに気がついていたのである。そこで、彼らは<同一の経済的利益を確保するために>労働の機会を均等にするために、土地を、土壌の自然のおよび経済的差異によってきまる一定数の耕地帯〔大畑〕に分け、しかるのちにあらためて、これらのより大きな耕地帯のそれぞれを耕作者と同数の分割地に細分したのである。ついで、各人はそれぞれの耕地帯で一地片ずつ受け取った。ロシアの共同体によって今日にいたるまで永続させられているこの仕組みは、いうまでもなく、農学的要請とはあいられない。他のいろいろの不都合は別にしても、この仕組みは、労力と時間の浪費を必然にする。<しかし集団耕作への出発点としては、大きな利点がある。もし農民の耕す畑を一箇所にまとめたなら、彼はそこに主人として君臨することだろう。>⁽⁹⁾ しかしながら、この仕組みは、一見してそれとはあいられないかのように見える集団耕作への移行を、<出発点として>容易にしている (全集 19 p.409)。

* 分割地：parcelles

手島訳：分割地，大内訳：分割地

果たして、文中の分割地は、我々が知るところのいわゆる「農民分割地」と同じものであろうか。この「大きな耕地帯のそれぞれを耕作者と同数の分割地に細分した」における分割地は、農民分割地とは関係がない。ただの、散在する分与地の一片のことである。共同体成員がそれぞれ受け取る保有地、分与地とは、このような一片の集まり、しかも散在する地片である。

このパラグラフの後、最後の言葉がくる。

La parcelle (...) .

であった⁽¹⁰⁾。そして、文は中断する。この最後の分割地は、どうであろうか。それは、この直前の、文のなかの消された部分の一節、「もし農民の耕す畑を一箇所にまとめたなら、彼はそこに主人として君臨することだろう」における、一箇所にまとめられた土地、しかも農民がその上に主人として君臨する、に関係する。すなわち、文字通りの農民分割地である。

この最後の、おそらく最も重要なパラグラフだけではなく、最初の草稿（第二草稿）以来、分割地ということばの両義性が、混乱をもたらしたかのようにも見える。また、それを何とか、日本語に翻訳しなければならなかった各版の翻訳者たちについても同じことがいえるはずである。ただ、大内訳は、parcelle、parcellaire は、分割地、分割地的と、ほぼ一貫して訳している。大内が、マルクスは分与地 = 分割地と考えていた、とみなしていたからであろう。

それに対し、日南田静馬（1973）は、対照的なスタンスをとっているようにみえる。福富論文へのコメントのなかで、彼は、第三草稿の最後の言葉である、la parcelle を「土地小片」と訳しているからである。日南田は、第三草稿の最後のパラグラフにおいて、マルクスが言葉を費やして土地細分化に言及している点に注目し、「私は、ここで、ロシア共同体農民の現実へのマ

ルクスの接近が、ふたたび『第三(草稿)』をふまえたうえではじまっているように思える」と評価している。はたして、そうであろうか。たしかに、平田清明がもっとも高く評価した第三草稿(ii)は、最後に異質の部分を含んでいた。それゆえ、日南田が、マルクスは再びロシアの共同体の現実に接近したと評価する点については、そのとおりであると思う。「耕作者と同数の分割地に細分した」とある分割地はまさに土地小片であった。すなわち、マルクスは再び、ロシアの現状に戻ろうとしたのであろう、だが、最後の言葉である分割地は、やはり、その直前で消去された「一箇所にまとめられた土地、しかも農民がその上に主人として君臨する」を強く意識したものと考えらるべきであろう。それゆえ、それを土地小片と訳すことはできないであろう⁽¹¹⁾。

もし、分割地という言葉が、この草稿において、それほど意味をもたなかったのであれば、おそらく、マルクスは、他の用語にした場合と同様に、それを消去するか、あるいは別の言葉に置きかえ、議論を進めたであろうし、第三草稿を書き始める時に抱いていた構想に沿って議論を展開し、ロシアの農村共同体の歴史的意義と、その将来の展望—社会再生の拠点となる—を描出して、手紙を終わらせることになったであろう。だが、そうならなかった。多分、そうできなかったであろう。

問題はやはり、分割地と分与地の同一視である。マルクスは、第二草稿に続く第一草稿において、タキトゥス時代のゲルマン的共同体とロシアの農村共同体に共通の割替慣行の存在を検出し、そこから農耕共同体の理論モデルを創出する。ゲルマン的共同体における、成員の保有地は、割替があろうとなかろうと、それぞれ強い所有性を有しており、その後、その強さは中世後期の自営農民の分割地所有の成立につながるものとなったが、そのような所有の強さは、ロシアの農村共同体には本来欠けているものであり、そこにおいて割替慣行を主な指標として、異質の共同体を同じ理論モデル＝農耕共

同体に組み込むことには慎重であるべきであった。だが、マルクスはおそらく、ザスーリチだけではなく、ロシアの多くのインテリゲンチアが持つ「農村共同体」への、他の国々のとは比較にならないほどの強い思いに引き摺られ、思わず一歩踏み込んでしまったのではないか。

ただ、マルクスがロシア農村共同体の分与地の実態を知らなかったはずはなかった。分与地については、全集第19巻(1875-1883)の、ちょうど「ザスーリチへの手紙」(第一、第二、第三草稿)の直後に置かれた、「一八六一年の改革と改革後のロシアの発展についての覚え書」(全集第19巻)に、言及がある。分与地[Nadjel]の悲惨な状況が、そこここに書かれてある⁽¹²⁾。

1867年出版された『資本論』の最初の外国語訳は、ロシア語版であり、その翻訳者ダニエリソンとマルクスは長期にわたり文通を行っていた。ダニエリソンからは、ロシアの歴史や現状を伝える文献が多数マルクスに寄せられていた。それゆえ、マルクスが分与地の現状について知らなかったなどということは考えられない。ただ、マウラーの影響のもと、ロシア農村共同体における農民保有地(分与地)が、起源的には分割地に近かったのではないかと考えた可能性はある。また、共同体に課せられた過重な重荷がなくなったら、分割地と同じ役割をはたし得ると考えていたのであろう。

平田清明(1971)の第三草稿(ii)の要旨「人類史としての世界史の展開過程における共同体の諸形態＝段階論を普遍的に展開し、その巨大な世界史的視野の中でロシアのミール共同体を位置づけ、その歴史的環境の特殊性検出と相まって、ロシアでの共同体維持発展、の可能性を展開しようとするもの」は、見事な把握ではあるが、根本的な問題を孕んでいる。つまり、巨大な世界的視野の中で位置づけられるのは、少なくとも、ミール共同体ではない。ミールに仮託されたゲルマン的共同体であろう。マルクスは第一草稿→第三草稿へと、勢い込んで筆を進めるにつれ、ロシア農村共同体の現状から大きくはずれてしまった。だが、第三草稿の最後のパラグラフの分割地は、ただの分与地の細片にすぎなかった。分割相続と割替によって、各農民

の耕地は次々と細分化され、宅地・屋敷地から離れ、合理的な農業など不可能なほどに散らばっていく。

細分化された耕地（土地小片、地条）について語った後、次に分割地と書いた時、マルクスは、自分がロシア農村共同体の分与地に、分割地本来の強さを埋め込もうとしていることに、そして分割地と分与地の距離の大きさに気がついた。そう推測している。だから、もう書き進めることはできなかった、と解する。

全体的にいえば、最初の草稿「第二草稿」では、試行錯誤しつつ各問題事項の発展性を探り、次の「第一草稿」で、農耕共同体を見つけ、気持ちが悪く乗ってしまい、「第三草稿」で、それを大いに発展させてしまった。当初は、ロシアの現状から出発したつもりであり、また、第一草稿では、問題の鍵、ゲルマンとロシアに共通するキーワード農耕共同体を見つけたつもりであったし、第三草稿は、その農耕共同体を歴史理論として発展させ、それをロシアの農村共同体の現状に関連付けたつもりであった。だが、そこで、ロシアの共同体が分与地にすぎず、それを分割地と呼んだとしても、単なる小地片の集まりにおいてそうであるにすぎず、それが農民分割地ではあり得ないことに気づいた。そういうことだと思う。

農民保有地が単なる小地片の集まりにすぎず、かつそれらが共同体的所有に強く従属しており—それゆえ到底農民分割地とはいえないものだったら、何がまずいのだろうか。それは、新しい社会の質に関係する。

マルクスは、これまでの三つの草稿のいずれにおいても、『資本論』の適用範囲をめぐる議論から筆を進めていた。引用されていたのは、フランス語版『資本論』第26章「本源的蓄積の秘密」からである。だが、『資本論』第一部、本源的蓄積をめぐる議論の最後の部分、全集版第24章第7節、あるいは、フランス語版第32章「資本主義的蓄積の歴史的傾向」に、以下のような記述があることを忘れてはならないであろう。

資本主義的な生産様式から生まれる資本主義的取得様式は、したがってまた資本主義的私有も、自分の労働にもとづく個人的な私有の第一の否定である。しかし、資本主義的生産は、一つの自然過程の必然をもって、それ自身の否定を生みだす。それは否定の否定である。この否定は、私有を再建しはしないが、しかし、資本主義時代の成果を基礎とする個人的所有をつくりだす。すなわち、協業と土地の共同占有と労働そのものによって生産される生産手段の共同占有を基礎とする個人的所有をつくりだすのである（全集 23 p.995）。

このパラグラフは、平田清明が、1969年『市民社会と社会主義』において、新しい社会において到達されるべきは、一般にいわれているような社会的所有（国有）ではなく、より高いレベルの所有、すなわち共同所有にもとづいた個体的所有であると力説したところである。

マルクスが、第三草稿の途中において、分割地と書いた直後に、文章を中断した時、そこまで考えて中断としたとは思わないが、問題の一端に気づいた可能性はある。分与地は現実には分散した小地片であり、農民は共同体に従属せしめられ、かつ国家および土地貴族の苛酷な搾取のもと、施肥も行わないような農業において、経営の主体として一日本人が好む言い方では、小経営的生産様式の主体として一ミールの農民が成熟しつつあるのか、あるいは自らを育てているか、疑問であろう。そこに仮に革命が起こり、上から社会主義の網がかぶせられたとしても、彼らは果たして社会の主人になりえるだろうか。自分たちの農地の主人になりえるのだろうか。

おそらく、革命の対象、動員の対象にしかならないだろう。革命の側からの社会的所有の強調は、結局は、農民を再び剰余の供出を強制されるだけの存在に貶め、革命後の社会は、社会主義でも共産主義でもなく、たんなる集産主義になる可能性が高いであろう。共同体そのものであれ、共同的諸関係であれ、強制されたものであるかぎり、古い隷属に新しい隷属がとって替わ

るだけである。それは、歴史の後知恵だが、すでに20世紀社会主義の実践が証明している。

分与地が分割地ではありえないことに気が付いた以上、とくに第二草稿から第三草稿にかけての勢いが止まり、ミール共同体の内発的な発展が来るべきロシア社会主義を支える、といったような視点を取りえなくなった、と考える。可能なのは外部に包摂された革命の道、すなわち西欧プロレタリアートの革命と、それに連動するロシア革命、かつ西欧社会主義の成立と、その影響下のもとでのロシア社会主義の発展、そしてそのもとで、ロシアの共同体の再生が可能となる、という道筋である。それでも国民の大部分が農民である国家において、共同体が再生することは、社会主義を目指す新しい国家の礎となるには十分である。それが再生の拠点という意味であろう。

第四草稿および手紙本文が最初の三つの草稿とは異なって、極めて簡単なものになった最大の理由はそこにあると思う。

ザスーリチへの手紙本文ではこう述べられている。

「すなわち、この共同体はロシアにおける社会的再生の拠点であるが、それがそのようなものとして機能しうるためには、まずはじめに、あらゆる側面からこの共同体におそいかかっている有害な諸影響を除去すること、ついで自然発主的発展の正常な諸条件をこの共同体に確保することが必要であろう、と」。

おそらく、このような記述が、マルクスは草稿の中断においても、草稿の内容自体は、その後においても観点として変更されていない、との諸家の判断を生んだのであろう。

では、有害な諸影響、各種搾取装置が取り除かれれば、分与地 = 分割地になると考えていたのであろうか。マルクスが、19世紀に存在していた土地の共同所有を、原始的な共同所有の遺制であると考えていたがゆえに、そ

のような始原的原理が復活する可能性を信じていたからかもしれない。たとえば、マルクスはダニエリソンへの手紙（1873年3月22日）で、こう述べている。

すべての歴史的類推はチチャーリンに不利です。どうしてまたロシアではこの制度が財政上の措置として、農奴制の附随的な出来事として始められたにすぎない、というようなことになったのでしょうか。ロシア以外ではその同じ制度がどこでも自然に成長したものであり、自由な諸民族の発展の必然的な一段階を画しているというのに（全集33 p.469）。

すなわち、マルクスはあくまでも、チチャーリンらの共同所有の非連続性説に対し、共同所有の連続性説を支持していたのである。それゆえ、もし共同体に課せられた有害な影響が取り除かれ、それらの傷が癒えたなら始原的な共同体的原理が復活すると信じていたのだ。

筆者には、ここで、ロシアの共同所有の成立に関する論争に言及するゆとりはないが、中国史に携わる者として、中国史の経験を踏まえ、一言述べておきたい。伝統中国の農村には村落共同体は存在しない。村落はあるがその村落は共同体ではない。これが実証されたのは、満鉄調査部により1940年代前半に行われた華北農村慣行調査とその資料の刊行を通じてであった。だが、その結果を受容するには長い時間が必要であった。

中国の村落がいつごろから共同体ではなくなったかを明示することはできないが、おおよそ、専制国家の成立後であったと思われる。専制国家の重圧の下、共同体は押しつぶされたといえよう。具体的には、苛酷な抑圧と搾取の下、その負担に耐えず、農民たちは負担を押し付け合うしかなかった。上層農民が負担を回避し、より劣位の農民たちに転嫁した。そのようなところでは、共同体はその呈を維持し得ない。共同体が共同体であるためには、指

導層はその地位や役割に応じて、多少の偏差はあっても、その負担を引き受けねばならない。だが、国家からの過重な負担、とくに職役の重い負担を引き受ければ、破産するしかないとするば、露骨な負担の転嫁に走るしかなく、共同体は維持しえなくなる⁽¹³⁾。負担の押し付け合いには、身内をかばい合う親族組織が支えとなる。宗族が広がる。

マルクスが農耕共同体の重要な指標とした割替慣行が、ロシアにおいては近世以降の産物であること、とくに定期的割替が、ピョートル改革期における負担のいっそうの増大(1723年人頭税の導入)に対応すべく、18世紀以後形成された、ということも重要な事実である。それは、プリミティブな社会から国家成立期に生じた現象ではないのだ。

ロシアにおける専制国家の生成とともに、共同体には重税が課せられ、徴税を確保するために連帯責任制がとられるようになった。いっそうの負担強化をしのぐべく、賦課された義務を、支払能力の単一労働力、夫婦、成人男子の数など一で、分け合うことになる。それらの賦課単位には、それぞれ消長・増減がある。それを調整するために、共同体内における土地の割替が広がった。ただ、問題は、このような割替がシステムとして成立するためには、長期にわたる共同体の存在を前提としなければ成立しえない、ということである。もし、共同体が存在しない社会において、農民たちに、より過重な負担が課せられれば、農民たちは、それを互いに押し付けあうか、あるいは負担を他人に転嫁するしかない。徴税や治安の便のため、如何に国家が農民たちに共同体を押し付けたとしても、それはおごなりで、形ばかりのものになるであろう。共同体の実質が伴うことはない。

ロシアにおける専制主義の生成、その深まりとともに、共同体は幾度も再編され、その負担に耐えつつ幾重にも変容していった。一般的には、変容された結果においても共同体が存在しているとするば、変容以前のものも共同体でなければつじつまは合わない。つまり出力が共同体であるとするば、入力もまた共同体でなければならぬ。だが、度重なる再編により変容を重ねた

結果、始原にあるものとの距離は、たえず拡がっていく。とりわけ専制に耐えつつ、それと共存したものは、専制の重みがなくなっても、始原に戻ることはない。

たとえば、中国では、村落共同体の解体後、北魏から隋唐にかけて、均田制が施行された。あるいは、20世紀中葉、社会主義中国において土地改革が行なわれ、農民たちに土地が分配され、さらに合作社、人民公社が成立した。しかし、北魏以来数世紀にわたる均田制のもと、共同体復活に都合の良い環境があったにもかかわらず、当時、村落は共同体として復活しなかったし、20世紀の社会主義均田制のもと、共同体を称する人民公社が創られたが、その解散とともに共同体もまたあっさり消失した。共同体が根づくこともなかった。専制国家のもとで共同体を人為的につくることはできない。

筆者のような、分与地 = 分割地、ではない、ということがマルクスの手紙草稿を書き続けることを不可能にした、と考えれば、このような視点は、従来の「ザスーリチへの手紙」に関する先行研究において提出された様々な議論に大きな影響を与えることになる。また、「ザスーリチへの手紙」以後書かれたマルクスおよびエンゲルスのロシア論に対する、我々の見方についても、変化が生じるはずである。とくに、1882年、『共産党宣言』ロシア語版序文における、マルクスとエンゲルスの見解の相違といった諸家の見方についても、大いに再考の余地が出てこよう。

「第四草稿」および手紙本文が草稿に比べ著しく簡単なものになっていた理由の一つとして、党派性の問題がある。マルクスはザスーリチの問いかけに応じて、熟考し、試論を繰り返したが、ペテルブルクの中央委員会（人民の意志派）への顧慮から、その成果をザスーリチへ伝えることは控えた、という見解である。筆者は、別の観点に立つ。というのも、党派性の問題については、マルクスは次第に冷静になって、公平に対処しようとした、と考えるからである。

1890年4月17日のエンゲルスからザスーリチへの手紙には、以下のような見解が述べられている。マルクス死後、エンゲルスは、ラブロフ、ロパーチンなどナロードニキに対しては、依然として親密な友人として対応していたが、思想的・政治的には、プレハーノフ、ザスーリチなどマルクス主義者を支持するようになる。ザスーリチが、当時ロンドンで発行されていたドイツ社会民主党機関紙『ゾツィアル・デモクラート』において、他派（ナロードニキ）も自派（労働解放団）と同じように扱われ、自派に対し、より鮮明な支持を打ち出さないことに不満を述べたことに對し、エンゲルスは

こういう人たちにたいしていっさいの友好的態度を拒否すべきものでしょうか？ それはロシア人内部の事柄への干渉になるでしょうし、どんなことがあっても避けなければならないでしょう。…そしてデンマークの二つの党派にたいしても、みずから「革命派」の側にすっかり共感しているにもかかわらず、中立を守っています。ロシア人にたいしても同じことです（全集 37 p.346）。

とたしなめている。このような原則がいつごろから採られるようになったかについて、筆者は明確にすることはできないが、少なくとも、同じような原則を、1880年代初頭のマルクスも取り始めていたのではないかと考えている。最初の草稿（第二草稿）にあった、ザスーリチらに対するつれない対応を、その後改めたのも、その表れであろう。それゆえ、彼らが支持している人民の意志派への顧慮から、ザスーリチには、あのような素っ気ない、返信しか出さなかったのだとする、見解を採らない。問題はあくまで、マルクス自身の理論的な齟齬の発現にあったと考える。それゆえ、草稿における推敲を活かすことができず、短い返信ですまさざるを得なかったのだ。

V) 結語に代えて

最後に、網野、斎藤らの「ザスーリチへの手紙」の理解は正しかったのか、根拠があったのかどうかについてである。本稿冒頭の網野の言説は、「ザスーリチへの手紙」そのものを研究対象としたものではなく、1970年当時の、共同体論の水準とその志向を、情緒的に述べたものであり、それ以上のものではない、と考える。

「ザスーリチへの手紙」は、『資本論』の適用範囲を西欧に限定している点などから、歴史発展のオルタナティブを示すテキストとして読まれてきた。マルクスの歴史発展論が、必然性（不可避性）一本やりではなく、多様な発展を許容するものであることを、「ザスーリチへの手紙」を参照することなく、他の文献から明らかにしようとするれば、少しばかり骨が折れるはずである。また「『オテーチェストヴェンヌイエ・ザピスキ』編集部への手紙」（『祖国雑記』編集部宛の手紙）1877）などよりも、この文献が好んで引用されるのは、やはり、女性革命家ザスーリチやプレハーノフを含む彼らのグループがよく知られており、彼らをめぐる話題が豊富であり、さらに、理論家たちにとっては、やはり第三草稿（ii）の部分が魅力的だからであろう。

ただ、上記で示したように、この第三草稿（ii）で示した、資本主義浸透下のロシア農村共同体の発展可能性に関しての、マルクスの理論モデルは、ロシアの共同体の歴史と当時の現状とは齟齬をきたしており、かつ分割地をめぐる論点に関しては未完に終わっている。筆者はむしろ、第三草稿（ii）については、『諸形態』のゲルマン的共同体についての補充、もしくは新たな理論展開と捉えるのが妥当だと思う。それゆえ、「ザスーリチへの手紙」を、所有の形成史研究において『諸形態』などとともに参照するのはともかく、それを、資本主義の時代における非西欧世界—ロシア及びロシア以外—の共同体の、発展可能性へと遡及させることは、いよいよ難しく、なすべきではないと考える。

老婆心ながら書き添えれば、斉藤幸平のような読み方そのものを批判しようというのではない。マルクスの歴史理論を直線史観に仕立て上げた革命の神学は一切廃絶すべきであり、かつ、新しい読み方の試みは依然として、要請されている。つねにバージョンアップが必要なのだ。しかし、それでもなお、史料批判は慎重に維持される必要がある。つまり、当たり前のことを言っているつもりである。斉藤のオルタナティブ論は、その論拠を別に求めなければならないし、かつ、そうすることを期待したい。

本稿は、ある小さな研究会（滝村隆一記念研究会）において報告した内容に、少なからず加筆したものである。

筆者は、本来中国近現代史をフィールドとしており、かつアジア的生産様式論争など、マルクス主義者による理論的实践と、その実践における歴史的現実との格闘に関心を寄せてきた。その意味で、マルクスおよびエンゲルスの原典そのものの釈義を問題とするような意味でのテキスト・クリティークは自分のフィールドではない。それは筆者の手に余る問題である。筆者は、むしろ、諸家のテキスト・クリティークの成果を、歴史研究における理論的实践に生かすことを目指してきた。それゆえ、今回のような論考は、自らの研究領域の外にある、自らの能力を超えたものだと考えている。

今回、本稿で提示したような見解、とくに第三草稿が途中、「分割地」で中断されていることの意味合いを考えるようになってから、十年以上立っている。最初の契機は、中国における東方社会理論を論じた小稿（福本 2011）の執筆であった。この「東方社会理論」とは、「カウディナ峠資本主義跳び越え論」とも呼ばれるもので、いわゆる「ザスーリチへの手紙」のカウディナ峠の故事をもとに、マルクスがロシアおよびその他のアジア的社会において、カウディナのくびき門、すなわち、苦難にみちた資本主義を経ることなく社会主義へ到達する道を認めた、と考えるものであり、とりわけ、1989年天安門事件以後、一時国際的に孤立した中国の経済発展論を支えるイデオ

ロギーの役割を果たしていた。筆者は、当時、「ザスーリチへの手紙」、とくに第一草稿や第三草稿を何度も読み返しながら、この第三草稿における「分割地」のこぼをもつての中断は、マルクスが分割地≠分与地と判断するに至ったからではないかと考えるようになった。

だが、筆者自身は、ロシア史に造詣が深いわけでもなく、ロシア語もできない。また、マルクス主義の創始者たちの文献を扱うのに必須なドイツ語やフランス語ができるわけでもない（どちらも辞書を使って解読するレベルである）。それゆえ、この問題については、自分だけの思いつきとしてすますつもりであった。2022年初め、上述の研究会において、初めて「ザスーリチへの手紙」における中断の意味について、自分なりの見解を述べた。少数の身近な研究会だからこそ、このような自分には荷が重いテーマについて自己の見解を述べることができたのだと思う。その後、ロシア・ウクライナ戦争が始まり、石井知章教授に誘われ、マルクス『一八世紀の秘密外交史』（白水社）の翻訳に参加し、かつ、その解説（中露専制主義論）を引き受けることになった。出版（2023年3月末）までの慌ただしさのなかで書かれた筆者の解説は、ロシア史に関しても、中国史に関しても、かつ「一八世紀の秘密外交史」に関する先行研究についても、十分に調べ上げたとは言い難いものであった。そのため、「解説」を書いた後も、中露専制主義に関する文献を継続的に読んでいる。かつ、「ザスーリチへの手紙」についても、再び、ロシアの共同体、土地制度に関連する著作、とくに日本のロシア研究者たちの優れた諸労作を読み続けている。その中で、筆者のような疑問、つまり第三草稿の中断の意味について触れた著述は、管見のかぎりではあるが、見つけることができなかった。70歳代半ばという筆者の年齢を考えれば、残された時間は短い。ともあれ自分の未熟な見解を活字にすることによって、誰かの目に止まり、どんな形にせよ、その反映が得られることを切に期待したい。

マルクス『一八世紀の秘密外交史』（2023）出版を契機として、ロシア史

研究の諸労作に触れ、ロシア専制主義と中国専制主義の比較を通じて、専制主義への理解が一步深まったと考えている。中国研究の末席に連なるものとして、中国専制主義の理解の深まりがまた、ロシア専制主義の理解にながしかの寄与をすることを願っている。

注)

- 1) このような回想記においては、網野の言ったことなのか、それとも著者中沢が網野の言ったことを著者なりに解釈して言っているのかが、問題となる。ただ、この著作は著者の叔母である網野夫人に読んでもらっている、と後書きに書かれてあるので、実際に、ほぼ網野の言ったことだと考えてよいと思われる。
- 2) 中沢新一は、網野の死について、「死は人生最善の友である。それに網野さんは揺るがない魂をもつ唯物論者だから、きっと恐れずにこの最善の友の手に、自分をゆだねていくのだらう」と書き、網野が最後までマルクス主義者であったと証言している。筆者も網野の諸著作から、そのような印象を得ている。
- 3) 2月16日の日付のあるザスーリチへの手紙がマルクスのもとに届いたのは2月20日、ザスーリチへの返信の日付は3月8日である。なお、第四草稿の日付もまた3月8日である。他の草稿には、日付はない。
- 4) 第四草稿は、全集版では訳出されていないので、手島訳、大内訳を参照している。
- 5) 福富正実論文(1973)のコメントに日南田静真をもってきた当時の『現代の理論』編集部の慧眼に感謝しなければならない、と思う。文末の文献リストをみればお分かりいただけると思うが、20世紀の「ザスーリチへの手紙」の先行研究において、平田、福富など新左翼系の論客のほかは、ほぼ、みなロシア研究者である。マルクスの共同体論、もしくは「晩年のマルクス」などの問題については、当時のロシア研究者の力量が相当なものであったことを示している。
- 6) ウィットフォーゲル「序」、石井知章・福本勝清編訳、マルクス『一八世紀の秘密外交史』平凡社 2023

筆者は、タタールの軛とともに、その後のモスクワ大公国以後の専制の深まりを重視している。その深まりには、タタールの軛のおける外から（上から）の専制体制の押しつけに代わる、ロシア自体の専制の内化が進行したと考える。

ロシア専制主義生成の共同体の理論モデルを考えるとしたら、中央ロシアにおける度重なる遊牧民族の侵入を、それを防がなければ、住民全体が被害に遭う洪水のようなものと考え、それからの防衛のために、賦役や貢納の供出する共同体

農民の社会を考える。

祖型はスラヴ的な共同体（ゲルマン的共同体に比し、個人的所有は存在せず、共同の備蓄のようなものがある）である。公共事業として華北の治水を治めるものが、中原の王であったが、同じく、公共事業として、遊牧民の侵入を防ぐものが、首長であり、さらに王たりえたのだと思う。

華北の共同体農民が黄河の治水のために、共同体のための賦役労働（社会的賦役労働）の徴発や年貢の供出に応じるように、ロシアの共同体農民も、政府（王侯）主催の共同事業である遊牧民からの防衛の戦いのために、賦役や貢納に供出に応じる段階が第一段階である。ただ、キプチャク諸族との戦いは、勝ったり負けたりで、両者の間には一種の均衡のようなものが存在したようにみえる。そのような場合、従来の收取様式が強化されたとしてもロシア社会の本質を変えるまでにはいたらない。

それに対して、モンゴルの来襲はまったく別の結果をもたらした。タタールの軛以後、打ちのめされたロシアの君主たちは、モンゴル人の専制を自らのものにしつつ、その専制の成立の進展とともに、支配層も貴族から勤務士族へ重心が移り、さらに共同体も専制の礎となるべく再編され、「農奴化」が進行する。

- 7) 凡例に、付録2「ヴェラ・ザサーリッチへの手紙」は野口隆氏が改訳した、と記されている。
- 8) このカウディナのくびき門を含むパラグラフが1980年代後半、とりわけ1990年代以降、中国独自の経済発展の道の、理論的な権威づけに利用されることになる。詳しくは福本（2011）を参照されたい。
- 9) これは全集第19巻「ヴェ・イ・ザサーリチへの手紙」（平田清明訳）第三草稿から引用している。だが、この消去部分は、手島正毅訳『資本主義的生産に先行する諸形態』付録「ヴェラ・ザサーリッチへの手紙」（国民文庫）、および大内力編訳「ヴェ・イ・ザサーリチの手紙への回答」『マルクス・エンゲルス農業論集』（岩波文庫）では訳出されていない。
- 10) なお、手島正毅訳（大月書店）および大内力編訳（岩波書店）には、最後のことば「分割地」が訳出されているが、なぜか、全集版（第19巻）には訳出されていない。
- 11) マルクス・エンゲルス・アルヒーフ（《Marx-Engels Archiv》1926）にあって、全集（《Werke》）には採録されなかった、第三草稿の一部、「終り」と書かれた紙片、があることを、日南田（1973）が述べている。「ドイツ・イデオロギー」等でも存在した、草稿をいかに取り扱い、一つのテキストに組みあげるかという意味における編集問題もまたありそうである。
- 12) ロシアの農民たちがオプシチナに保有地（分与地）を持つことは、国家からの強制的な奉仕義務を強請される根拠でもあった。外面的な形態は類似していたとしても、中世西欧から近代市民社会への展望を切り開いた農民分割地所有

の分割地とは、その由来も機能も異なるものであった(福本勝清「現代中国における封建論とアジアの生産様式論」石井知章編『現代中国のリベラリズム思潮』藤原書店2015)。

- 13) この問題に関しては、とりわけ、周藤吉之の宋代経済史四部作、『中国土地制度史研究』東京大学出版会(1954)、『宋代経済史研究』東京大学出版会(1962)、『唐宋社会経済史研究』東京大学出版会(1965)、『宋代史研究』東洋文庫(1969)、に啓発されている。

文献リスト

- マルクス「ヴェ・イ・ザスーリチへの手紙」、「ヴェ・イ・ザスーリチの手紙への回答の下書き」『マルクス・エンゲルス全集』第19巻、大月書店、1968
- マルクス「ヴェラ・ザスーリッチへの手紙」手島正毅訳『資本主義的生産様式に先行する諸形態』付録 国民文庫 大月書店 1963
- マルクス「ヴェ・イ・ザスーリチの手紙への回答」大内力編訳『マルクス・エンゲルス農業論集』岩波文庫 1973
- マルクス&エンゲルス『マルクス・エンゲルス全集』第32-39巻、書簡集1868-1895 大月書店
- マルクス『フランス語版資本論』上・下 江夏美千穂・上杉聰彦訳 法政大学出版局 1979
- アンダーソン『周縁のマルクス』平子友長他訳 社会評論社 2015
- ヴァリツキ『ロシア資本主義論争 ナロードニキ社会思想史研究』日南田静真他訳 ミネルヴァ書房 1975
- サミュエル・バロン『プレハーノフ ロシア・マルクス主義の父』白石治朗他訳 恒文社 1978
- フォン・ラウエ『セルゲイ・ウィッテとロシアの工業化』菅原崇光訳 勁草書房 1977
- ラエフ『ロシア史を読む』石井規衛訳 名古屋大学出版会 2001
- ワース『ロシア農民生活誌 1917-1959』荒田洋訳 平凡社 1985
- 青柳和身「『ザスーリッチへの手紙』の歴史認識の現実性と非現実性」『マルクス晩年の歴史認識と21世紀社会主義』桜井書店 2022
- 浅川雅巳「マウラーの<マルク共同体>研究とマルクス」平子友長他編『マルクス抜粋ノートからマルクスを読む』桜井書店 2013
- 淡路憲治『マルクスの後進国革命像』未来社 1971
- 桂木健次「ロシア・ミール論の学說的整理をめぐって」『経済学研究』第40巻第1号 1974
- 菊地章典『ロシア農奴解放の研究』御茶の水書房 1964

- 栗原百寿『農業問題入門』有斐閣 1955
- 小島修一『ロシア農業思想史の研究』ミネルヴァ書房 1987
- 小島修一「ミール共同体の起源をめぐる諸見解」『大阪市大論集』第22号 1975
- 崔在東『近代ロシア農村の社会経済 ストルィピン農業改革期の土地利用・土地所有・協同組合』日本経済評論社 2007
- 斎藤幸平『人新世の「資本論」』集英社新書 2020
- 阪本秀昭『帝政末期シベリアの農村共同体』ミネルヴァ書房 1998
- 雀部隆一『レーニンのロシア革命像』未来社 1980
- 佐藤正人「『ザスーリチの手紙への回答』およびその『下書き』考」『経済学研究』, 22 (4) 1973
- 佐藤正人「ミール共同体と農業集団化 B. II. ダニーロフの見解によせて」『経済学研究』, 23 (2) 1973
- 佐藤芳行『帝政ロシアの農業問題』未来社 2000
- 鈴木健夫『帝政ロシアの共同体と農民』早稲田大学出版会 1990
- 田中真晴『ロシア経済思想史の研究』ミネルヴァ書房 1973
- 田中真晴「晩年マルクス覚え書」『経済論叢』, 109 (1) 1972
- 田中真晴 & 小島修一「経済思想史におけるロシア論 共同体の問題を中心に」『経済学史学会年報』通巻19号 1981
- 田中陽兒『世界史学とロシア史研究』山川出版社 2014
- 外川継男『ゲルツェンとロシア社会』御茶の水書房 1973
- 土肥恒之『ロシア近世農村社会史』創文社 1987年
- 土肥恒之「『死せる魂』の社会史 近世ロシア農民の世界」日本エディタースクール出版部 1989
- 土肥恒之『ロシア社会史の世界』日本エディタースクール出版部 2010
- 鳥山成人『ロシア・東欧の国家と社会』恒文社 1985
- 中沢新一『僕の叔父さん』集英社新書 2004
- 林道義『スターリニズムの歴史的根源』御茶の水書房 1971
- 肥前栄一『ドイツとロシア 比較社会経済史の一領域』未来社 1997
- 日南田静真『ロシア農政史研究』御茶の水書房 1966
- 日南田静真「ロシア資本主義とミール共同体 林氏の新著によせて」『社会科学の方法』第5巻第5号 1972
- 日南田静真「福富正実『B・II・ザスーリッチへの手紙の回答およびその下書き』へのコメント」『マルクス・コンメンタール』V 現代の理論社 1973
- 平子友長「マルクスのマウラー研究の射程」平子友長他編『マルクス抜粋ノートからマルクスを読む』桜井書店 2013
- 平子友長他「ケヴィン・アンダーソン『周縁のマルクス』解説」平子友長他訳『周縁のマルクス』社会評論社 2015

- 平田清明『市民社会と社会主義』岩波書店 1969
- 平田清明「歴史的必然と歴史的選択—マルクス『ザスーリチあての手紙』について
文献史と理論内容」(一)～(三)『展望』1971.10-12
- 福富正実「B・II・ザスーリッチへの手紙の回答およびその下書き」『マルクス・コンメンタール』V 現代の理論社 1973
- 福本勝清「1990年代中国におけるアジア的生産様式論の後退と東方社会理論の興
起」『明治大学教養論集』No.467 2011
- 増田富壽『ロシア農村社会の近代化過程』御茶の水書房 1973
- 松木栄三『ロシアと黒海・地中海世界 人と文化の交流史』風行社 2018
- 保田孝一『ロシア革命とミール共同体』御茶の水書房 1971
- 保田孝一『ロシアの共同体と市民社会』岡山大学文学部 1993
- 保田孝一『最後のロシア皇帝 ニコライ二世の日記』朝日新聞社 1985
- 若森章孝「晩年のマルクスと周辺資本主義分析—『ザスーリチへの手紙』とその草
稿を中心にして」『経済論集』第34巻第3号 1984
- 和田春樹『マルクス・エンゲルスと革命ロシア』勁草書房 1975
- 和田春樹『テロルと改革 アレクサンドル二世暗殺前後』山川出版社 2005

(ふくもと・かつきよ 名誉教授)